

# 西洋と自民族の音楽文化に対する子どもたちの意識

— シンガポール・マレーシア・日本・タイ王国を例に —

阿部 祐治・奥 忍

(音楽教室)

**要旨：**現在、どの国やどの地域においても最も大きな影響を与えている異文化の音楽は西洋の音楽である。一方、自民族の音楽に文化的象徴としての役割を担わせようとする動きも起きている。本小論では、西洋の音楽が異文化であるアジア諸国の中からシンガポール、マレーシア、日本、タイ王国をとりあげ、その社会的背景となっている文化、教育と子どもたちの音楽文化に対する意識との関係をアンケート調査に基づいて考察する。

**キーワード：**子どもたちの意識 西洋の音楽 自民族の音楽

## 1. はじめに

一般に子どもたちは、自己の環境において出会う多種多様の音楽のなかから自分の好きな音楽を自由に選択し、それを楽しんでいる。現代の情報化社会において、マスメディアやAVテクノロジー等のめざましい発展はそれをより容易なものとしている。現在ではある民族の中で生まれた音楽がまたたく間に国境を越え、別の民族の子どもたちのあいだで楽しまれるといった現象は日常的に起こっている。例えば、日本においてアメリカン・ポップスが楽しまれ、タイ王国において日本の歌謡曲が楽しまれるといった具合に、ある民族独自の音楽文化以外のものを子どもたちが楽しむといった状態は決して珍しいことではない。そのような外来の音楽文化はそのまま受容されるものもあれば、そうでないもの、また受容の過程において自文化の音感覚による干渉を受け変形されるもの（奥 忍 1988 a 1-9）など反応は様々である。

このような異文化である外来の音楽文化のなかで、今世紀世界中どの国やどの地域においても最も大きな影響を与えたのは西洋の音楽であろう。ネットルは「地球全体の音楽史における過去100年間で最も意味深い現象は、西洋の音楽と音楽思想がそれ以外の世界に与えた大きな力である。」（Nettle, B. 1985 3）と述べ、20世紀は世界の諸文化が音楽の面で西洋文化と最も激しい相互作用を起こす時代であるとしている。

---

How Do the Children in Asian Countries Feel Western Music and their Folk Music?

— In the Case of Singapore, Malaysia, Japan, and Thailand. —

Yuji ABE (Department of Music Education, Graduate Student of Nara University of Education, Nara )

Shinobu OKU (Department of Music Education, Nara University of Education, Nara )

ネットルを待つまでもなく、西洋の音楽がそれぞれの社会に、そして子どもたちにも受入れられてきたということは明白であり、その傾向はアジア諸国においても例外ではない。むしろこれらの国々においては総体的にみて、生活の上での西洋化に伴って西洋の音楽が歓迎されつつ受容されてきたともいえよう。特に子どもたちの音楽指向は、ポピュラー音楽を中心としつつも西洋の音楽文化を一種のステイタスシンボルとみなしている感すらある。

一方、西洋の文化の受容が進むと同時に自民族の文化的アイデンティティーに固執し、それを保持していこうとする動きも起きている。これらの動きは、独立や民族解放運動などを通じて多くの民族が政治や文化の主体となる契機を得たことや、その反面全く同じ文化シンボルが自民族中心主義を刺激する（Anderson, B. 1987 61-83）など、ナショナリズムとも密接に関係しているといえる。このような傾向は音楽文化にも共通してみられる。ネットルはこの傾向について「文化の境界が不明瞭になり、それを守る必要が生じた時に音楽の機能はますます重要になり、音楽に民族性の象徴という役割を与えてきた。」（Nettle, B. 1985 165）と述べている。

自民族の音楽に文化的象徴としての役割を担わせようとする動きは、文化的・社会的背景の相違によって、質・量共に様々である。そのような様々な状況の中で育つ子どもたちの意識は、恐らく彼らのおかれた状態を如実に反映しているのではなかろうか。本小論では、西洋の音楽の受容形態が異なるシンガポール、マレーシア、日本、タイ王国の4カ国をとりあげ、その社会的背景となっている文化、教育と子どもたちの音楽文化に対する意識と実態を明らかにしたい。

## 2. 文化的・社会的背景

それぞれの国の子どもたちの音楽に対する意識を明らかにするまえに、それに関して特に重要であると思われるそれぞれの国の文化的・社会的背景・音楽教育の事象について言及する。

### (1) シンガポール

複合民族国家であるシンガポールは1988年現在、中国系シンガポール人76.5%、マレー系シンガポール人15.0%、インド系シンガポール人6.5%（National Institute for Educational Research, Tokyo 1988 240）で構成されている。マレー系シンガポール人を除いて、国民の85%が東南アジア以外からの移民で占められている。建国後27年しか経っていないこの国において、各民族間に共通した文化的アイデンティティーが存在しないのは当然であると思われる。

音楽文化においては、各民族はそれぞれ独自の音楽、例えば中国の音楽、マレー音楽、インド音楽などを自文化の音楽としているが、総括的なシンガポール独自の音楽は存在しない。シンガポールは東西の文化の接点といわれているように街の中では世界の多種多様な音楽を耳にする。しかし、共通語として英語を用い、生活のうえでもその大部分を「西洋化」することに努めてきたと言われるシンガポール人にとって、西洋の音楽は最も楽しまれている音楽の一つであるといえる。シンガポールの子どもたちにとって最も身近な音楽が西洋の音楽であることに違いはないであろう。

学校音楽教育はイギリスのシステムを採用し、中等学校の一部ではケンブリッジ検定試験のガ

イダンスに従ってそのままの授業を展開している場合さえみうけられるのである。総体的にカリキュラムは西洋の音楽理論に則って組み立てられてはいるが、教科書の内容は日本や近隣諸国を含んでおり、アジアから世界へと視野が広がられている。

## (2) マレーシア

マレーシアもシンガポールと同じく複合民族国家である。現在のところ、人口比はブミプツラ（Bumiputera）とよばれるマレー人と先住土着民60.1%、中国系マレーシア人30.9%、インド系マレーシア人8.4%（National Institute for Educational Research, Tokyo 1988 178）で、これら3民族でそのほとんどを占めている。そこではブミプツラがイスラム教、中国系マレーシア人が仏教・儒教、インド系マレーシア人がヒンドゥー教というように、それぞれの民族、宗教、言語、習慣などあらゆる面にわたって一国のなかに異質性が混在する。当然のことながらそれらの文化的基盤は異なり、個々の民族はそれぞれのアンデンティティーを有し、独自の価値を主張してきた。このように共通する文化的基盤の乏しい現状にあっては、各民族固有の文化は存在しても、総体的なマレーシア文化といえるものは存在していないのである。国家原理（Rukunegara）には「豊富で多様な民族の文化的伝統の自由を保証する。」（Ministry of Education Malaysia 1989 78）と表明されているが、総体的なマレーシア文化の育成までには至っておらず、マレーシア文化の概念は時運に即して、また民族ごとに解釈が異なっている。例えば、ブミプツラにとってマレーシア文化とは多数の国民を代表すると思われる文化、つまりマレー文化であり、中国系マレーシア人にとってのマレーシア文化とは各民族の文化全てを包括した総体的な文化と捉えているのである。

国民文化についてコンセンサスが存在しない状況は音楽文化に関しても同様である。マレーシアでは、マレー音楽やインド音楽が存在してもマレーシア音楽は存在していない。ポピュラー音楽界において、「アライ・キャッツ」のようにインド系や中国系の若い歌手が一つのグループでバハサ・マレーシア（マレーシア語）の歌を歌うといった新しい意識が生まれているのは事実だが、このような傾向は現在のところ極めて弱い。

こうした背景のなかで、マレー人はバハサ・マレーシアによる歌謡曲、インド系マレーシア人はタミール語の歌謡曲というように、民族ごとにそれぞれ支持する歌謡曲を持っている。ここでの唯一の共通項は外来の音楽である。欧米のポップスをはじめ日本やインドネシアの歌謡曲が楽しまれ、クアラルンプールなどの都市部においては、流れてくる音楽はほとんど日本と変わらないように思われる。

しかし、これら多くの外来の音楽のなかで最も影響力が大きいのはやはり西洋のそれといえる。そのまま直輸入のまま楽しまれている曲もあれば、「P.ラムリー」や「シャリファー・アイニ」などにみられるように、ジャズやラテンといった西洋の音楽要素をマレー音楽に取り入れ、マレーシアン・ポップスも生まれている。これらのマレーシアン・ポップスが流行していることから、その影響は非常に大きいものであることが分かる。

学校音楽教育においては、カリキュラムは西洋の音楽理論に則ったかたちで行われている。そ

のなかにはリコーダーを中心とする器楽教育や、教材においてマレーシアの各民族のフォークソングなども扱われている。

### (3) タイ王国

学校を離れての子どもたちの音楽行動は、首都バンコクとその他の都市や地方では大きく様相を異にしている。地方都市や農村地方においては、西洋の音楽はあまり浸透しておらず伝統音楽が主流のようである。祭りや仏教儀式などにもなった伝統音楽を耳にする機会も少なくない。とはいえ、舞踊劇（ラコーン）や仮面劇（コーン）などの古典音楽ですら西洋の音楽の影響を受け以前のものとは相違があり（石原 笙子 1970 1）、伝統音楽でさえ西洋の音楽の影響が全くないとは言えない。

ところで、タイ王国において子どもたちを取りまく環境のなかで他国と異なる最も特徴的なものは学校音楽教育である。タイ王国では音楽は人格形成にとって最も重要なものの一つと考えられており、合科教育システムのなかで人格形成の領域に含まれている。教科名は「音楽・舞踊」と称され、音楽の教育内容に舞踊が含まれているのも特徴的である。

学校音楽教育の出発点として、タイの音楽を明確に位置づけし、それを中心に学習した後、視野を広げていこうとする方法がとられている。カリキュラムにはタイ音楽の体系を含み、タイ語による一種の数字符が学習される。教材に関してもタイ王国の歌曲や伝統舞踊でそのほとんどを占めている。また、「音楽・舞踊」の授業では、教師のチンチャップとよばれる伝統楽器のリズムによって、歌ったり、舞踊の基本パターンを習得するといった方法が行われている。

少なくとも義務教育期間の6年間は小学校において、子どもたちは自文化であるタイの音楽や舞踊を学習している。

## 3. アンケート調査の目的

音楽教育における従来の比較研究のほとんどは、教育理念や教科書のみを対象としている。しかし、音楽教育の諸問題を考えるに際しては、子どもたちの意識・行動の実態を把握することが必須の作業である。なぜなら、教育理念や個々の教科書は固有の社会や文化を背景に育っている子どもたちを対象にするものであるからである（奥 忍 1988 b 1）。とりわけ、西洋の音楽と自民族の音楽が反応し合っていくという現代の社会を考える時、そこに育ち次の音楽文化の担い手である子どもたちがどのように考え、またそれが何を意味するのかを認識する必要は今まで以上にあるのではないだろうか。

この調査は、以上に述べた異なった社会で育つ子どもたちが、西洋の音楽と自民族の音楽をどのように意識しているか明らかにすることを目的としている。しかし、複数の国で様々な地域を抽出し、総体的な子どもの意識調査を個人で行うことは不可能である。そこで、子どもの生活が典型的と思われる都市の学校1、2校を選び、そこでの調査がその国を代表させるという形をとった。その意味で、この調査はパイロット的性格を持っているにすぎない。

#### 4. 調査方法

##### (1) 調査方法と内容

質問紙法による。同一内容をそれぞれの国の言語によりシンガポールでは英語、マレーシアではバハサ・マレーシア、日本では日本語、タイ王国ではタイ語で実施した。内容については、以下の6つのポイント（表1）に関する16項目の質問（表2）から成り立っているが、本小論においてはQ-2、7の後半部分とQ-11. 12. 13. 16. は省略する。

（表1）

ポイント1.	「西洋の音楽」と「自民族の音楽」に対する愛好度と将来の見通しについて	Q-1. 6. 14.
ポイント2.	「西洋の音楽」と「自民族の音楽」の経験について	Q-2. 7.
ポイント3.	「西洋の音楽」と「自民族の音楽」に対する知識の自覚について	Q-3. 8.
ポイント4.	「西洋の音楽」と「自民族の音楽」に対する学習意欲について	Q-5. 10.
ポイント5.	学校での「音楽」の授業における「西洋の音楽」と「自民族の音楽」に対する愛好度について	Q-4. 9.
ポイント6.	「西洋の音楽」の到来に関する意識について	Q-15.

(表 2 - 1)

QUESTIONNAIRE

Please indicate whether you are

- ☐ Male  
☐ Female

Q - 1. Do you like western music?

- ☐ very much  
☐ much  
☐ average  
☐ not so much  
☐ not at all  
☐ I can not understand the question.

Q - 2. Have you ever enjoyed western music?

- ☐ always  
☐ often  
☐ sometimes  
☐ seldom  
☐ not at all  
☐ I can not understand the question.

If so, where did you enjoy it?

Please check as many as you like.

- ☐ during school hours  
☐ Club extracurricular activities  
☐ Private school  
☐ in assembly with neighborhood at social activities  
☐ in assembly with neighborhood at religious occasion  
☐ on the TV and radio  
☐ at home  
☐ Background music in cities  
☐ at concert  
☐ Festival  
☐ Others ( )

Q - 3. How much do you have knowledge of Western music?

- ☐ very much  
☐ much  
☐ average  
☐ not so much  
☐ not at all  
☐ I can not understand the question.

Q - 4. Is Western music in your classroom activities enjoyable for you?

- ☐ very much  
☐ much  
☐ average  
☐ not so much  
☐ not at all  
☐ I can not understand the question.

Q - 5. Would like to study about Western music any more?

- ☐ very much  
☐ much  
☐ average  
☐ not so much  
☐ not at all  
☐ I can not understand the question

Q - 6. Do you like your folk music and folk dance of your race?

- ☐ very much  
☐ much  
☐ average  
☐ not so much  
☐ not at all  
☐ I can not understand the question

Q - 7. Have you ever enjoyed your folk music and folk dance of your race?

- ☐ always  
☐ often  
☐ sometimes  
☐ seldom  
☐ not at all  
☐ I can not understand the question.

If so, where did you enjoy it?

Please check as many as you like.

- ☐ during school hours  
☐ Club extracurricular activities  
☐ Private school  
☐ in assembly with neighborhood at social activities  
☐ in assembly with neighborhood at religious occasion  
☐ on the TV and radio  
☐ at home  
☐ Background music in cities  
☐ at concert  
☐ Festival  
☐ Others ( )

Q - 8. How much do you have knowledge of folk music and folk dance of your race?

- ☐ very much  
☐ much  
☐ average  
☐ not so much  
☐ not at all  
☐ I can not understand the question.

(表 2 - 2)

Q-9. Is you folk music and folk dance of you race in your school lessons enjoyable for you?

- ☐ very much
- ☐ much
- ☐ average
- ☐ not so much
- ☐ not at all
- ☐ I can not understand the question.

Q-10. Would you like to study about your folk music and folk dance of your race any more?

- ☐ very much
- ☐ much
- ☐ average
- ☐ not so much
- ☐ not at all
- ☐ I can not understand the question.

Q-11. Including Western music and your folk music and folk dance of your race, is the lessons of music in your school enjoyable for you?

- ☐ very much
- ☐ much
- ☐ average
- ☐ not so much
- ☐ not at all
- ☐ I can not understand the question.

Q-12. Which do you like better, Western music or your folk music and folk dance of your race in your school lessons?

- ☐ I like both of them.
- ☐ Western music
- ☐ Folk music and folk dance of my race
- ☐ I dislike both of them.
- ☐ I can not understand the question.

Q-13. What is the most enjoyable activities for you in your school music lessons?

- ☐ Playing musical instruments
- ☐ Singing
- ☐ Listening to music
- ☐ Composing pieces
- ☐ Studying music theory
- ☐ Dancing
- ☐ Others ( )

Q-14. In your future, which will you prefer, western music or folk music and folk dance of your race?

- ☐ Both
- ☐ Western music
- ☐ Folk music and folk dance of my race
- ☐ I will dislike both.
- ☐ I can not understand the question.

Q-15. Do you welcome that Western music is coming into your country?

- ☐ very much
- ☐ much
- ☐ average
- ☐ not so much
- ☐ not at all
- ☐ I can not understand the question.

Q-16. If you can play any musical instruments, or you can dance, please write the names of them as many as you like. And how can you play the musical instruments, or dance? Who taught you them? Please use symbols in the square and write them on the table.

Name of instrument of the kind of dance	How can you play or dance?	Who taught you it?

How can you play or dance?

- A. very well
- B. well
- C. a little
- D. quite a little

Who taught you it?

- a. school teacher
- b. teacher in private school
- c. family
- d. friend
- e. at social activities
- f. at religious occasion
- g. acquaintance
- h. self-education
- i. others ( )

Thank you very much.

## (2) 調査対象

日本の中学校3年生にあたる学年を対象に、大都市部、もしくはその都市に隣接する近郊の平均的な公立学校において実施した。その内訳は表3の通りである。

(表3)

国 名	都 市 名	全体人数	男子	女子
シンガポール	シンガポール	201名	113名	88名
マレーシア	クアラルンプール	192名	121名	71名
日 本	奈 良	155名	74名	81名
タイ王国	ナコンサワン	227名	116名	111名
		119名	69名	50名

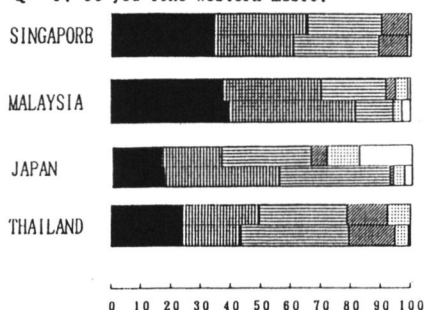
(3) 日 時 1991年2月～10月

## 5. 結果と考察

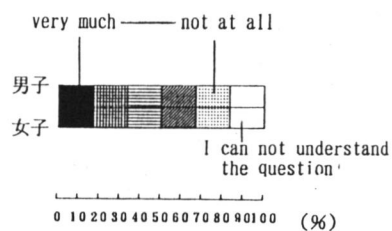
ポイント1. 「西洋の音楽」と「自民族の音楽」に対する愛好度と将来の見通しについて  
(Q-1, 6, 14.)

(図1)

Q-1. Do you like Western music?

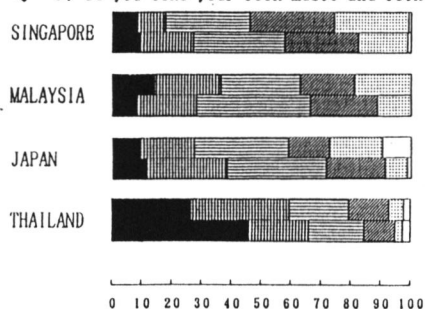


凡例



(図2)

Q-6. Do you like your folk music and folk dance of your race?





(図3)

Q-14. In your future, which will you prefer, western music or folk music and folk dance of your race?

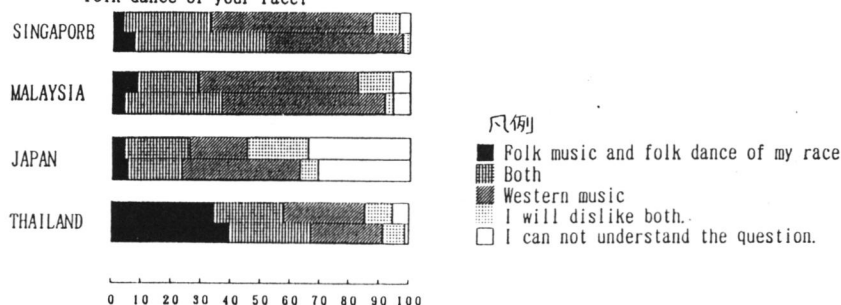


図1は西洋の音楽に対する愛好度、図2は自民族の音楽に対する愛好度、図3は将来どのような音楽を楽しんでいるだろうかという問いに対する子どもたちの見通しを表している。

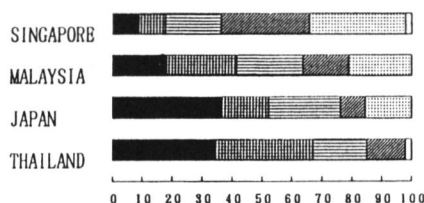
西洋の音楽を愛好する者はどの国においても多く、一方、自民族の音楽に対する反応は国によってかなりの相違がみられる。西洋の音楽を愛好する者が他より多く、しかも自民族の音楽に対して否定的な回答も多いのがシンガポールとマレーシアである。特にシンガポールでは48.2%の者が自民族の音楽を「嫌い」と答えており注目される。日本でも同様の傾向がみられるが、自民族(日本)の音楽を否定的にとらえる者は29.1%で先の2国よりは少ない。タイ王国では西洋の音楽に対する反応は日本と類似しているが、自民族の音楽を愛好する者が群を抜いて多い。

西洋の音楽と自民族の音楽に対するこのような反応はそのまま将来の見通しにもつながっていくように思われる。どの国においても約半数の者が「西洋の音楽」あるいは「両方」を楽しんでいるだろうと回答しており、それに比べて「自民族の音楽」あるいは「両方」を楽しんでいるだろうと答えた者は少ない。このことから、西洋の音楽の影響が今後ますます強くなるだろうと子どもたちが感じていることが窺える。特にシンガポールでは「西洋の音楽」と答えた者が「自民族の音楽」あるいは「両方」と答えた者を上回っており、自民族の音楽に否定的な傾向がここにも現れている。

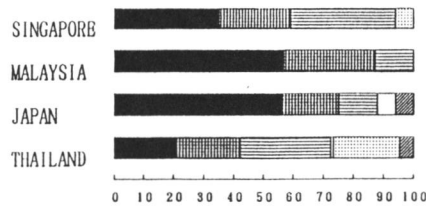
以上述べた傾向は、西洋の音楽を「大変好む」及び自民族の音楽を「大変好む」と答えた者のみを取り出してみるとより典型的に現れてくる(図4、5)。どの国においても自民族の音楽を「大変好む」層では西洋の音楽をも好む者が一定数を占めているが、反対に西洋の音楽を「大変好む」層には自民族の音楽を好む者が少ない。このように、自民族の音楽を好む者は西洋の音楽を好むことができ、反対に西洋の音楽を好む者には自民族の音楽に否定的な傾向がみられることは大変興味深い。

(図4)

Q-6. Do you like your folk music and folk dance of your race?  
(Q-1. で「very much」と答えた者のみ抽出)

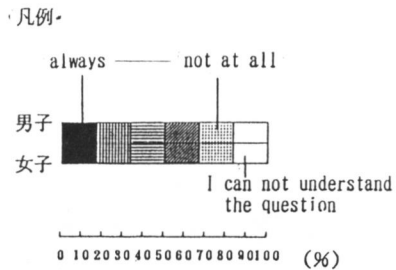
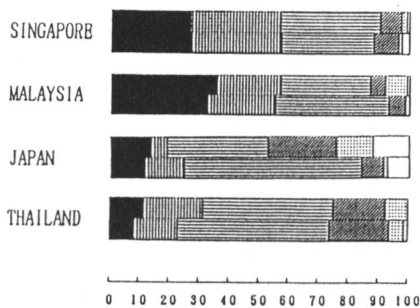


(図5)  
Q-1. Do you like Western music?  
(Q-6. で「very much」と答えた者のみ抽出)



ポイント2.「西洋の音楽」と「自民族の音楽」の経験について(Q-2. 7.)

(図6)  
Q-2. Have you ever enjoyed Western music?



(図7)  
Q-7. Have you ever enjoyed your folk music and folk dance of your race?

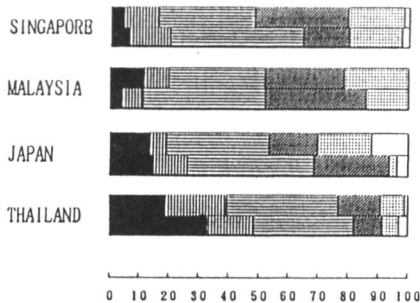


図6は西洋の音楽を実際にどの程度楽しむ経験をしたか、図7は自民族の音楽を実際にどの程度楽しむ経験をしたかを表している。

西洋の音楽を楽しんだ経験のある者は特にシンガポールとマレーシアに多く見られ、「常に」と「たびたび」で約半数を占めている。しかしその反面、自民族の音楽を「全く楽しんだことがない」と「ほとんどない」と答えた者が両国ともに約半数を占め、ポイント1. と同様、愛好度のみならず実際の経験のうえでも西洋の音楽の影響が大きいことを意味している。

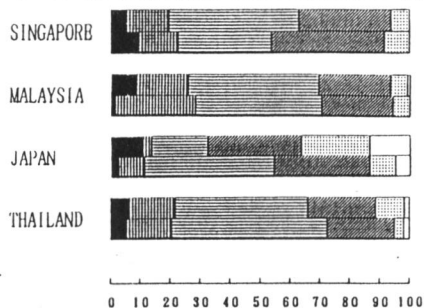
一方で、タイ王国においては西洋の音楽についての経験は日本とほぼ類似しているが、自民族

の音楽を楽しむ経験を「常に」と答える者は西洋の音楽と比べても多く、タイ王国の子どもたち、特に女子は自民族の音楽に接する機会が他国よりも多いことが分かる。

ポイント 3. 「西洋の音楽」と「自民族の音楽」に対する知識の自覚について (Q-3, 8.)

(図 8)

Q-3. How much do you have knowledge of Western music?



(図 9)

Q-8. How much do you have knowledge of folk music and folk dance of your race?

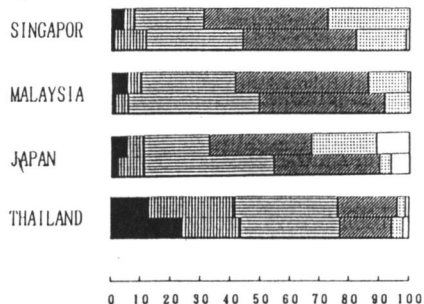


図 8、図 9 はそれぞれ西洋の音楽と自民族の音楽の知識をどれくらい持っているかという問いに対する子どもたちの回答の比率を表している。

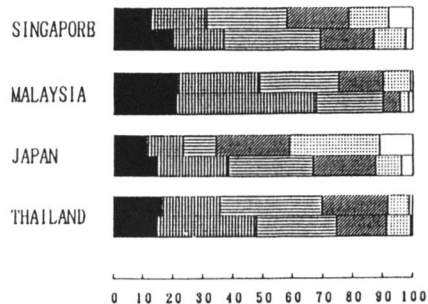
ポイント 1. 2. において検討した愛好度や経験と比較して、全体的に西洋の音楽と自民族の音楽ともに知識に乏しいと感じる者が多い。西洋の音楽の愛好者が多くみられたシンガポールとマレーシアにおいて、愛好度と知識の差が大きく、「大変ある」と答えた者が 1 割に満たない。また、この 2 国においては自民族の音楽の知識が「全くない」「ほとんどない」と答えた者で半数以上を占めているが、その数は、特にマレーシアでは西洋の音楽の知識について同様に答えた者の約 2 倍にあたる。ここでも、西洋の音楽の影響の強さと自民族の音楽に対する否定的な傾向を感じざるをえない。

一方、日本では、西洋の音楽と自民族（日本）の音楽についての知識の間にそれほど差がみられない。タイ王国においては、自民族の音楽の知識を「大変ある」「ある」と感じる者が 42.5% を占めている。

ポイント4.「西洋の音楽」と「自民族の音楽」に対する学習意欲について（Q-5. 10.）

(図10)

Q-5. Would you like to study about Western music any more?



(図11)

Q-10. Would you like to study about your folk music and folk dance of your race any more?

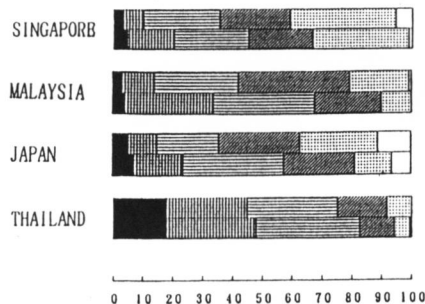


図10は西洋の音楽に対する学習意欲、図11は自民族の音楽に対する学習意欲を表している。タイ王国を除く3カ国においては、西洋の音楽に対する学習意欲のほうが自民族の音楽に対する学習意欲よりも大きく、特にシンガポールとマレーシアにおいては顕著である。また、両国では自民族の音楽に対して学習意欲のない者が多く、学習意欲のうえでも自民族の音楽に否定的な傾向にあるといえる。

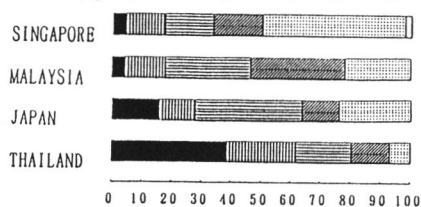
タイ王国においては、これまでの傾向にみられるのと同様に西洋の音楽に対する学習意欲よりも自民族の音楽に対する学習意欲の方が大きい。しかし、西洋の音楽に対する学習意欲も決して小さいものではなく、シンガポールよりも大きい点は大変興味深い。

以上述べた傾向は、Q-1. において西洋の音楽を「大変好む」と応えた者のみの自民族の音楽に対する学習意欲（図12）、Q-6. において自民族の音楽を「大変好む」と応えた者のみの西洋の音楽に対する学習意欲（図13）を取り出してみれば、より典型的に現れてくる。

図12にみられるように西洋の音楽を「大変好む」と答えた者は自国の音楽に対する学習意欲を持つ者が少なく、さらに後者に比べて学習意欲のない者が多く占めている。しかし、図13にみられるように、自民族の音楽を「大変好む」と答えた者でも西洋の音楽に対する学習意欲のある者

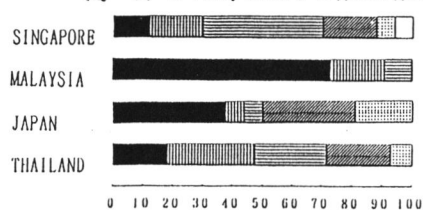
(図12)

Q-10. Would you like to study about your folk music and folk dance of your race any more?  
(Q-1. で「very much」と答えた者のみ抽出)



(図13)

Q-5. Would you like to study about Western music any more?  
(Q-6. で「very much」と答えた者のみ抽出)



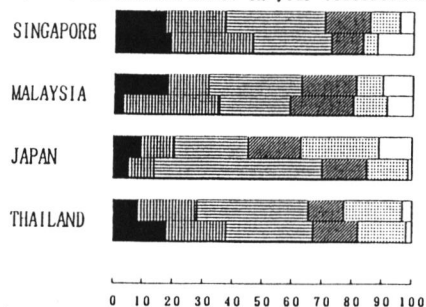
が多く、特にマレーシアは顕著である。タイ王国の場合、自民族の音楽指向でありながらも西洋の音楽に対する学習意欲はシンガポールよりも大きく、拒否反応も大きくない。

このように、学習意欲に関してもポイント1. 同様、自民族の音楽を好む者は西洋の音楽に対する学習意欲も大きく、西洋の音楽を好む者は自民族の音楽に対する学習意欲に関して否定的な傾向が窺える。

ポイント5. 学校での「音楽」の授業における「西洋の音楽」と「自民族の音楽」に対する愛好度について (Q-4. 9.)

(図14)

Q-4. Is Western music in your classroom activities enjoyable for you?



(図15)

Q-9. Is your folk music and folk dance of your race in your school lessons enjoyable for you?

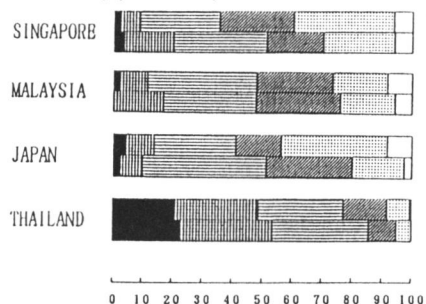


図14、図15はそれぞれ学校での「音楽」の授業における西洋の音楽と自民族の音楽に対する愛好度を表したものである。

ポイント 1. で考察した西洋の音楽と自民族の音楽に対する愛好度とを比較してみると、学校での「音楽」の授業においては両者ともに「楽しくない」と答える者がどの国においても多くなっている。たとえ西洋の音楽が好きであっても授業では楽しくない、また自民族の音楽についても同様に感じる者が少なくないことが分かる。

またここでも、「音楽」の授業において西洋の音楽を愛好する者は一定数みられるが、自民族の音楽についてはシンガポール、日本、マレーシアにおいてはほぼ半数前後の者が「楽しくない」と答え否定的な回答をしている。タイ王国では、自民族の音楽についても「楽しい」と感じる者が他国に比べて群を抜いて多く、否定的に感じる者も少ない。

ポイント 6. 「西洋の音楽」の到来に関する意識について (Q-15.)

(図16)

Q-15. Do you welcome that Western music is coming into your country?

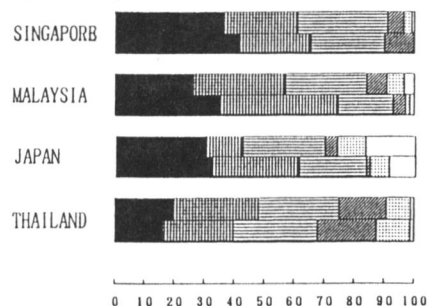


図16は、西洋の音楽がそれぞれの国の子どもたちの社会に到来することに関する意識について、その回答の比率を表したものである。

総体的にみて、どの国においても西洋の音楽を歓迎している傾向にある。シンガポールとマレーシアにおいては、「大変歓迎する」「歓迎する」と答えた者が約6割を占め、西洋の音楽の受容に積極的であるといえよう。タイ王国においては、4カ国のなかで最も歓迎されてはいないものの、「大変歓迎する」「歓迎する」と答えた者で44.5%を占めている。

## 6. おわりに

以上、西洋の音楽を音楽的母語としない東南アジアと日本の子どもたちを対象に、音楽に対する意識をポイントごとに考察してきた。これらの結果から以下の3点が示唆される。

1. 西洋音楽指向になればなるほど、自文化である自民族の音楽に否定的な反応を示す。それは時に、排他的な傾向を示す場合もありうる。またその反対に、自民族の音楽指向の者は、異文化である西洋の音楽を理解し楽しむに至ることができる者が多い。
2. 西洋の音楽は子どもたちにとって一種のステイタスシンボルであり、生活の上での西洋化に伴って、意識のみが先行する傾向にある。それゆえ、「好き」と意識しても、楽しむという行為や知識の自覚、また学習意欲にまで通じない者が多く存在する。
3. 上記の2点はそのまますchool音楽教育にも通じており、自民族の音楽を中心とした教育においては、異文化である西洋の音楽へも子どもたちの目を向けることができる。

日本では、明治以来学校教育においては日本の音楽よりもむしろ異文化である西洋の音楽を消化することに集中してきた。これは、西洋諸国における学校音楽教育が現在までのところまず自国の音楽を重視し、音楽的母語をある程度確立した上で世界の音楽へと目を広げていくのとは基本的に異なった方法をとってきたのである。その結果、学校教育を受ける子どもたちは皆それぞれ、意識的であれ、無意識的であれ、自己に内在する音感覚を西洋の音感覚に戦わせねばならなかった（奥 忍 1991 a 182-195）。現在の子どもたちも、特別な学習をしなくても日本的音感覚を保持している（奥 忍 b 1991）にもかかわらず、表面的には日本の音楽、特に伝統音楽に対し背をむけているといわれる今日、何がそうさせているのかを再度、学校音楽教育の場で検討する必要があるのではないだろうか。

本調査は、各国1～2校の子どもたちを対象に行った、いわばパイロット的調査にすぎない。従って、全体を把握するためには今後の調査における対象の拡大が不可欠である。しかし、以上のことをなお考慮しても本調査の結果から、自文化が消化されていることが異文化を理解し、個々の現象固有の意味を見いだすことにつながっていくことが、明確に示唆されているといえるだろう。

## 謝辞

本小論作成の基礎となる調査に快く協力していただいた、各国の中学校の先生方や子どもたち、あらゆる面で御協力いただいたタイ王国ナコンサワン市音楽指導主事の Winai Rugkarat 氏、並びに東南アジア各国の調査に長期にわたり同行していただいた音楽科教育専修大学院生の久保正美氏、また資料の整理に際して御協力いただいた友人の中川一氏、岡田圭二氏に厚く御礼申し上げます。

## 引用文献

- Anderson, B. 1987 想像の共同体—ナショナリズムの起源と流行 リプロポート  
石原 笙子 1970 タイ国の古典音楽研究—Chui Chai の曲を中心に 音楽学第15巻 音楽之友社

- Ministry of Education Malaysia 1989 Education in Malaysia 1989, Ministry of Education Malaysia, Kuala Lumpur
- National Institute for Education Research, Tokyo 1988 Some Critical Aspects of Secondary Education in the Countries of Asia and the Pacific, National Institute for Education Research, Tokyo
- Nettle, B. 1985 The Western Impact on World Music—Change, Adaptation, and Survival Schirmer Books, New York
- 奥 忍 1988 a 大正時代に日本人の音感覚はどのように変化したか 奈良教育大学教育研究所紀要第24号
- 1988 b 音楽教育に関する子どもたちの意識調査—日本、オーストラリア、イギリスの比較 音楽教育論叢第4号 関西音楽教育研究会
- 1991 a 「世界音楽」教材に関する問題 音楽教育学の展望Ⅱ 音楽之友社
- 1991 b Has the Musicality of the Present-day Japanese Been Really Westernized ? The 31st International Council for Traditional Music, Hong Kong (unpublished)
- 関西楽理研究Ⅷ 1-14 関西楽理研究会 (日本語訳)